

「慶應医療」の現在と未来

慶應義塾大学は、新型コロナウイルスワクチンの職域接種にいち早く名乗りを上げ、最終的に慶應義塾内外の5万人近い方々の接種を行いました。パンデミック下で真価を発揮した「慶應医療」。伊藤塾長と医療担当の北川常任理事にその進化&深化について語っていただきました。



塾長
伊藤 公平



常任理事
北川 雄光

「塾長の就任の第一声は 「塾生の正常なキャンパスライフを取り戻す」

伊藤 私が塾長に就任した、まさにその週から全塾ワクチン職域接種プロジェクトがスタートしましたね。

北川 伊藤新塾長の下、私は大病院、医学部、看護医療学部、薬学部、健康マネジメント研究科、保健管理センターなど義塾の医療分野全般を担当することになりました。そこで、これから慶應義塾として医療全般で何ができるか考えていた矢先に、政府から企業や大学を対象にした新型コロナワクチン職域接種の発表がありました。伊藤塾長就任後、最初におっしゃったのは「塾生が失ってしまった正常なキャンパスライフを何とか早

く取り戻したい」、さらには「塾生に限らず留学生、留学予定者を含めて学生たちの未来を取り戻さなければいけない」ということでした。私自身も塾長の熱い思いに共感し、それに応えるべく、まずワクチン職域接種プロジェクトに取り組みことになりました。

伊藤 どのくらいの接種ワクチンを用意すればいいのか？ まずそこから考えなくてはなりませんでした。

北川 当初は私と塾長で4万人程度と見積もっていました。しかし、慶應義塾内のみならずキャンパス周辺の地域住民や他大・学学生なども対象に考えると、それでは足りないかもしれない……悩んでいたところ総務担当の岩谷十郎常任理事から「5万人にしましょう」という提案がありました。

伊藤 9月に延べ58日間の職域接種を終え、4万9320名の方々に合計9万8026回の接種を行いました。ただ、課題はワクチンの確保だけではありませんでした。

北川 そうなのです。ワクチンの打ち手確保が大きな課題となりました。大病院は急増するコロナ患者の診療と新宿区民のワクチン接種を担当していただくだけではなく、東京2020では信濃町キャンパスに近いメインスタジアムを中心とした救急医療を担っていたため、とても病院教職員だけで5万人分のワク

チンの打ち手を確保することはできませんでした。

伊藤 そこで北川さんは医学部同窓会の「三四会」や関連病院会、医療系3学部 of 研究者などをはじめ、慶應義塾に縁のある医療従事者に協力を呼びかけました。

北川 はい。皆さんまさに二つ返事で「やりましょう！」と協力をご快諾いただき、そこから一気にプロジェクトが動き出しました。

伊藤 塾長就任の翌週6月2日（水）に北川さんからワクチン職域接種の話伺い、早くも2日後の4日（金）には「三四会」や関連病院、さらに看護分野の同窓会「紅梅会」や薬学分野の同窓会「K P会」の方々が全面的に協力してくださるという話を聞いて驚くとともに、心強く思ったのを覚えています。

北川 私が驚かされたのは慶應義塾インフォメーションテクノロジーセンター（ITC）本部の方々でした。ワクチン供給を政府に申し入れたときには、すでに大変優れたワクチン接種予約システムを完成させていたのです。広報室は私たち2人の「新型コロナウイルスワクチン職域接種に向けてのメッセージ動画」をはじめ、ワクチンに関する情報提供を義塾内外に行ってくださいました。また、学生部を中心に、保健管理センター、総務部、病感染制御部で接種会場を運営し、さらに学生部の皆さんには他大学の接種希望者への対応も迅速に進めていただくなど、全てのキャンパスの方々が支えてくださいました。プロジェクトの成功は医療従事者だけではなく、慶應義塾社中一丸となった体制づくりができたためだと感じています。

伊藤 同時に今回のワクチンプロジェクトを通して、慶應義塾に大学病院と医療系3学部があつて良かったと感謝の気持ちを抱いた塾生や教職員は多かったらうと思います。多くの塾生が知らず知らず「慶應医療」に見守られ、かけがえのない学生生活のウェルビーイングが保たれている。パンデミックの中で

私を含めた慶應義塾関係者が皆、感謝の念を抱いたはずです。

北川 今回、医療従事者の塾員の方々が率先して「塾生たちのために自分たちができることをやりたい」と手を挙げて、意欲的にご協力くださったこと、事務系職員の方々も献身的に動いてくださったことに深く感謝し、感激しました。

新型コロナウイルス、そして東京2020で「慶應医療」が果たした役割

伊藤 慶應義塾大学病院は2018年に新病院棟1号館がオープンし、2号館・3号館と改修を進め、2022年にはいよいよ新病院棟のグランドオープンを迎えます。臨床研究中核病院として最先端の臨床研究を推し進める一方で、さまざまな困難な症状を抱えている患者さんが日々来院されます。まさにわが国の医の先導者として大きな社会的使命を果たしていると思います。大学病院長として病院経営に関わっていた北川さんだからこそ伺いたいのですが、事業として考えると現在の日本の保険医療制度の中では難しい面もあるのではないですか。

北川 確かにそうです。ただ私たちは、慶應義塾大学病院がさまざまな病気に苦しんでいる患者さんたちの「最後の砦」になる……そういう意識でやってきました。コストを度外視しても最善の医療を行わなければならないこともあると考えてきました。

伊藤 そうしたチャレンジと献身があるからこそ、医療は進化するわけですよ。

北川 その通りです。医療の世界で新しいことにチャレンジするためには、安全面や倫理面でも万全の体制を整えることが必要不可欠です。そのために、例えば大学病院には「臨床研究推進センター」があります。ここには各種の専門医に加えて生物統計専門家、臨床研究コーディネーター、プロジェクトマネジ

ヤー、治験・臨床研究業務担当者など百数十名のスタッフが所属し、大学病院や他の医療機関が手掛ける最先端の臨床研究を牽引しています。こうした研究体制に必要なコストをかけながら、病院経営を考えることは確かにチャレンジングではあります。しかし、医の先導者として果たすべき使命でもあり、そのチャレンジは続けていかななくてはなりません。

伊藤 東京2020開催においても大学病院をはじめ「慶應医療」は大きな貢献を果たしました。日吉キャンパスでは、体育研究所の下に集まった塾生や体育会の塾生たちによるボランティアが英国オリンピック・パラリンピック代表チームを迎えるための準備に尽力しました。また、スポーツ医学研究センターには世界的に知られたスポーツドクターである石田浩之教授がいます。英国代表チームの方々からも「ドクター・インシダなら心配ない」と全面的な信頼を得て、心置きなく本番に向かって練習に励まれたようです。当初、期待していた塾生と選手たちの直接的な交流はかきませんでしたが、グローバル本部や体育研究所、保健管理センターなど教職員の並々ならぬ努力によって、オンラインなどさまざまな手段で感染対策に万全を期して交流したのです。英国代表チームからは大変感謝されました。

北川 大学病院の東京2020対応としては、まず2017年に竹内勤病院長（当時）らを中心としたチームが、2012年にオリンピック・パラリンピックを開催したロンドンのメイン会場を視察しました。視察チームは大規模会場におけるさまざまな緊急事態対応、例えば急病やテロなどの事態を想定したノウハウを入手し、その後、順次若手医師を派遣して準備を重ねました。結局、無観客開催となりましたが、こうした万全の準備は決して無駄になったわけではなく、東京都災害拠点病院としての大学病院の機能および対応力の向上に結びついています。

伊藤 万全の準備と訓練を経て、大会期間中にスタジアムに詰めていた大学病院救急科の方々には「観客を入れても大丈夫」という自信があったのではないですか。

北川 特に若手医師はそう思っていたでしょうね。ワクチン接種のときにも感じたのですが、若い人たちの情熱が困難を乗り越える大きなエネルギーになっています。

アフターコロナの時代に 「慶應医療」が目指すものとは

伊藤 「慶應医療」の今後についてお聞かせ願います。

北川 パンデミック下でその力を発揮した慶應義塾全体の医療リソースを、日本の医療の発展向上のためにどのように生かしているか、アフターコロナの時代に私たちに問われます。そのキーワードの一つが「AIホスピタル」です。これはAI（人工知能）を活用して安全を含めた医療の質の向上、効率化、患者サービスの改善はもちろん、医療従事者の負担軽減などを目指す国全体のプロジェクトで、慶應義塾大学病院は内閣府からそのモデル病院として採択を受けています。

伊藤 私が理工学部長だった2018年から医工連携で取り組んできましたね。

北川 はい。AIというロボットを思い浮かべる方が多いと思いますが、それだけではなくデータサイエンスの応用、医療データの蓄積・連携・活用なども大切なファクターです。大学病院では「慶應バイオバンク」の構築が進み、患者さんの医療データを医療そのものや研究に安全に運用する体制が整いつつあります。

伊藤 データサイエンスといえば、理工学部と医学部が協働してAIデータサイエンスに取り組み新しい講座も2021年10

月にスタートしています。そのために拡張知能医学の第一人者 桜田一洋教授をお迎えしました。

北川 この新しい講座の運営会議で、医学部と理工学部の教員による活発なディスカッションを聞いてみると、慶應義塾の「医工連携」がますます進む期待感が高まりました。薬学部からのご提案で医学部と薬学部の共同講座もすでに始まっています。薬剤師の皆さんたちが、病棟で医師・看護師とともに活躍できる環境作りが急速に進んでいます。

伊藤 看護医療学部との連携はいかがでしょう。

北川 当然進めています。現代のチーム医療において、看護師の皆さんは、薬剤師の皆さん同様我々医師にとって最前線の現場で肩を並べて働く大切な仲間です。2018年に完成した新病院棟1号館のバックヤードには、薬学部を含めた医療系3学部の塾生が集まって実習できる共学エリアが設置されました。今後、2号館にも設置する予定で、医師、看護師、薬剤師をはじめとするチーム医療の実際の現場で学ぶその効果はとて大きいと考えています。

伊藤 大病院の新しい医療サービスとして、2023年に拡張・移転する予定の「予防医療センター」について伺えますか。

北川 「予防医療センター」は大病院ならではの高度な検査・診断を提供する“人間ドック”です。2012年に3号館にリニューアルオープン以来、多くの方々に受診していただき、現在は現在の施設ではまかないきれないほど予約が殺到しています。そこで森ビル株式会社との再開発事業「虎ノ門・麻布台プロジェクト」において同センターの拡張・移転を図ることになりました。それも単に規模を拡大するのではなく、従来の人間ドックに加え、いかに健康に生きるかをテーマに新しい未来型の予防医療を構築することを目指しています。

伊藤 どのようなサービスなのですか。

北川 受診者一人一人のライフスタイルに応じて食生活、運動面などのアドバイスを行い、生涯にわたってウェルネス・ウェルビーイングを実現できる社会を目指す新たな予防医療サービスです。もちろん場所は移転しても治療が必要となった場合の大病院との連携はさらに強化していきます。この未来型予防医療の実現においても、ワクチン接種と同様に、塾員がいる関連病院やクリニックも含めた「慶應医療」のネットワークが大きな力となるでしょう。

伊藤 現代の医療は医療やテクノロジーはもちろん、法律や経済などとも連携しながら発展していくと思います。今後進展が期待される遠隔医療、先ほど北川さんが言及されたバイオバンクなどは、その運用において法的整備が必要不可欠になります。慶應義塾にはそうした分野の専門家も充実していますから、人文・社会科学系と医療系の連携もますます活発化していくのではないのでしょうか。

北川 まさにその通りで、その点で慶應義塾には人文科学系も含めた幅広い分野の卓越した研究者がそろっていますから、医の最先端を志向する我々はとても恵まれた環境にいると思います。**伊藤** 社会の先導者を目指す慶應義塾がなすべきことは未来社会のグランドデザインを描くこと。北川さんにはその重要な一翼を担う「慶應医療」の先導者としてご活躍いただきたいと思っています。

北川 「慶應医療」はこの先も進化していきますが、一方で変わらない理念もあります。それが初代医学部長を務めた北里柴三郎先生が遺した「基礎・臨床一体型医学・医療の実現」。この理念は今回のコロナ禍でも存分に生かされ、世紀を超えて医学部・大病院に息づいています。